

「映文連アワード2024」受賞主要作品紹介

■最優秀作品賞（グランプリ）

名盤ドキュメント キャンディーズ『年下の男の子』
彼女たちのJポップ革命 （59分）

製作：テレコムスタッフ株式会社／株式会社NHKエンタープライズ／NHK

プロデューサー：長嶋甲兵、奥田朋之、松永真一、田中雅之 ディレクター：滝口一総、牟田高太郎 撮影：杉中敏行、森威宏 照明：高坂俊秀 録音：大西光 編集：柏崎源

【作品概要】 活動歴わずか5年、伝説のグループ キャンディーズのアルバム「年下の男の子」（1975年）の魅力に迫る。録音原盤のマルチ音声を聞きながら、ディレクター、作曲家、ギタリスト、マネージャーらが制作の舞台裏を証言、キャンディーズのアイドルを超えた高い音楽性や、声の魅力を再発見していく。デビューから解散に至るまで、自分たちらしく活動したキャンディーズの秘められた軌跡を追った。



【選考経緯】 「普通の女の子に戻りたい」と引退を発表、1978年5万余人のファンが見守った解散コンサートが社会現象にもなったキャンディーズ。半世紀を経た今、アルバム『年下の男の子』の録音原盤のマルチ音声を聞きながら、彼女たちの魅力に迫る試み。当時レコード制作に関わった松崎澄夫（ディレクター）、穂口雄右（作曲家）、水谷公生（ギタリスト）、篠崎重（マネージャー）各氏がかつてを振り返り、嬉々として語る話が抜群に面白い。元バンド仲間という関係性が曲作りに生かされたことも知得した。特に作曲家・穂口雄右氏の曲作りにまつわる話が圧巻で聞き応えがあった。これら制作陣に加え、秋元康、清水ミチコ、犬童一心、マーティ・フリードマン各氏によって、伊藤蘭（ラン）、田中好子（スー）、藤村美樹（ミキ）の歌唱が多角的に分析され、キャンディーズの声の魅力や音楽性の高さを再認識させられた。解散の真相も興味深く、自ら解散宣言した意味合いも十分に伝わる内容であった。本人たちは登場しないものの、単なるアイドル論を超えて、キャンディーズの魅力を音楽史的視点から紐解いた今までにない“キャンディーズ物語”となった。

■文部科学大臣賞

おもかげ復元師

続いていくいのちの側で (51分27秒)

製作：「おもかげ復元師」製作委員会

プロデューサー：瀬川徹夫、稲葉正治 ディレクター・編集：水元泰嗣 撮影：瀬川龍

【作品概要】東日本大震災で300人以上の遺体をボランティアで復元し、その時の思いを絵日記に描き留めていた笹原留似子氏。母が尼で祖先が山伏の家系に育った彼女が培ってきた死者への眼差しは、死を単なる不幸とだけ捉えてしまいがちな現代の死生観を大きく揺さぶる。東北地方の自然と文化が育む「死」と「生」の循環の中で、“おもかげ復元師”は今日も遺族に寄り添い死者を見送る。誰もが迎える多様な「死」をどのように受け止め、後に残された人たちの「生」にどのように繋げていけばよいのかを考える契機を探る。それは単なる防災意識を超えた「心の備え」となるのではないか。



【選考経緯】復元納棺師とは、事故や災害などで亡くなった故人の生前のおもかげを探し、出来るだけ元の状態に戻す技術を持つ人。その復元納棺師である笹原留似子さんが東日本大震災の折に描いた絵日記は、悲痛なテーマにも関わらず、柔らかく心を打つ。本作は、彼女の生い立ちや納棺師になった経緯、活動を追って、住職や法歯学者、心理学者など様々な人々のコメントを挟み、「死」との向き合い方を深く考えさせる映像となっている。笹原さんは、家族が対面したときに死を受け入れやすいよう、故人の一番いい笑顔に戻してあげ、悲しんでいる遺族に寄り添い、心のケアを行い、回復への支援を行う。何と必要不可欠な仕事であろうか。東日本大震災から10年以上経た今、様々な分野の専門家たちが連携し、防災訓練を行なうなど災害への対応の取り組みが行われていることも心強い。誰もが予期せぬことで、いつ大切な人を失うかもしれない。そのとき「死」をどう受け止め、残された人々の「生」に繋げていけばいいのか、改めて考えさせてくれる奥の深い秀逸な映像である。

■経済産業大臣賞

待ってろ、未来。

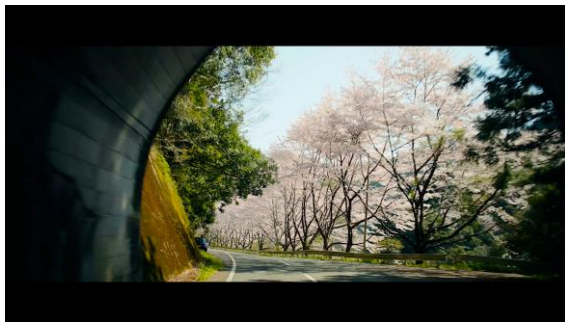
神山まるごと高専 入学式クロージング動画 (4分45秒)

製作：株式会社Happilm

クライアント：学校法人 神山学園

プロデューサー：山川咲、村山海優 ディレクター・編集：大石健弘 撮影：大石健弘、宮本佳史

【作品概要】 2023年4月、日本に20年ぶりに新設された高等専門学校、神山まるごと高専。世の中に変化を作り出し、日本の将来を担う学生を輩出することを目指す。入学する一期生44名、15歳。家を飛び出し、まだ誰もいない全寮制の学校に踏み出す彼らの決意は並大抵のものではない。期待と不安、別れ、その覚悟。それぞれの想いを胸に、全国から学生たちが集結し、自らの「成し遂げたいこと」を宣誓していく。この決意の様子をドキュメンタリーとして残すことで、二期生以降の学生やその親、パートナー企業に、この学校がもたらす希望を感じてほしいと願い制作。



【選考経緯】 神山まるごと高専は、徳島県名西郡神山町にある日本で20年ぶりに新設された高等専門学校。「テクノロジー×デザインで 人間の未来を変える学校」というコンセプトを掲げ、「モノをつくる力で、コトを起こす人」を育成する、ネット社会の未来に対応した情報工学に関する知識や技能を学び、つくりたいものを具現化するためのデザイン力を身につけ、“起業家精神”を養い、社会を動かす人材を育てる先進的な学校である。全寮制を敷くこの高専に全国各地から一期生44名が集まってくる。15歳といえば、親元を離れて一人暮らしするのも不安な時期。家族と別れて旅立つ姿が感動的に捉えられる。新しい理念を掲げる高専ということもあり、一期生それぞれの志は高い。後半では一人一人が自分の夢、学校に入ってやりたいことを意気揚々と語る。高専のある場所や授業内容など具体的な情報は省いているものの、生徒たちの意気込みがストレートに伝わり、明るい未来が期待できる、最良の学校だと思わせてくれる映像となった。

■優秀作品賞（準グランプリ）

Time and Tide -The Floating World- (28分)

製作：株式会社NHKエンタープライズ

クライアント：NHK WORLD-JAPAN

プロデューサー：星井渉、當眞嗣朗、浜野高宏 ディレクター・脚本・編集：横田洋 撮影：戸田正徳 CGI：下田章仁 音響効果：塚田大

【作品概要】 国際日本文化研究センターの副所長であるフレデリック・クレインズ教授が、東京・浅草の浮世絵ギャラリーを訪問したことを機に江戸時代へタイムスリップするという歴史アニメ。自らが浮世絵の世界に迷い込み、ペリーの来航や安政の大地震、麻疹大流行など、激動の幕末を生き抜いた日本人のレジリエンスを発見していく。自然災害やパンデミック、グローバル化といった現代に通じるテーマを外国人の視点で描いた。



【選考経緯】 浮世絵を動かしてアニメ化し、江戸末期、激動の幕末を外国人の視点から映像化した。国際日本文化研究センターのフレデリック・クレインズ教授が浮世絵の世界に迷い込み、浮世絵に描かれた女性「おくにさん」が江戸案内するという形で展開する。浮世絵を動かすこと自体は決して珍しいことではないが、江戸庶民のメディアであった浮世絵を独自の視点からストーリーを構築し、引き付けられるアニメ映像となっている。日本の鎖国を解くペリーの来航はよく知られるところだが、同じ時代に日本人が安政の大地震や麻疹大流行など、大災害やパンデミックに見舞われたという視点は意外性があった。脚本は緻密さをやや欠くものの、江戸庶民が自然災害や危機に臨機応変に対処し、乗り越える回復力を持ち合わせていたということ、ユーモアを交えて語り、日本をよく知らない海外の人々にも興味を持って見てもらえる分かり易い映像となっていた。

■優秀作品賞（準グランプリ）

美瑛の丘で （54分）

製作：株式会社WOWOWプラス／株式会社チョコレートボックス

クライアント：美瑛町短編映画制作実行委員会

企画：原田俊英 プロデューサー：原田俊英、池田禎子 ディレクター・編集：七字幸久

脚本：大前一明 撮影：中島美緒 照明：松田直子 録音：高橋俊

【作品概要】 北海道美瑛町に、東京から新規就農を目指してやって来た薫（岡本令）とリコ（川添野愛）の喜び、葛藤、そして成長を描いたヒューマンドラマ。美しい畑の景観は観光資源であり、農作物を育てる大切な土地でもある。観光と農業の境界線は今、様々な被害や問題を抱えていた。新規就農を目指し研修に励む薫とリコは、問題を目の当たりにし…。薫とリコが、移り変わる季節とともに成長していく姿を夏・秋・冬の3作を通して描く。本プロジェクトの主旨は、ご当地を賛美する映像を制作・放送することではなく、地方が抱える課題に対し、その解決施策とそこから見えてくる「地方の未来」を地方自治体や地元産業、地場企業と連携して取り組み、それをコンテンツ化して認知、理解を深めていくこと。



©WOWOWPLUS.2024



『美瑛の丘で…秋』©WOWOWPLUS.2024

【選考経緯】 北海道美瑛町に新規就農としてやってきたアラサーの薫とリコ。ドラマ仕立てで、美しい美瑛の景観、季節の移り変わりとともに二人の就農研修体験や地元の人たちとの関わり、農家の抱える問題などが描かれる。YouTuberでもあるリコは、農家のリアルを知ってもらおうと「私人土地侵入問題」を発信し、炎上してしまうが、当世風の設定で引き込まれるストーリーとなっている。何よりもなだらかな丘陵が続き、広大な農地が広がる美瑛の景観は美しく、就農を希望する女子の設定がリアリティに欠けるという意見もあったが、訪問客の行為が地元の人々の生活や自然環境・景観に負の影響を与えるオーバーツーリズムの問題を正面から取り上げるなど、地方が抱える課題に対して理解を深める好個の映像コンテンツとなっている。

■優秀作品賞（準グランプリ）

遠く離れて （37分25秒）

製作：黒田晋平

プロデューサー・監督・脚本・編集：黒田晋平 撮影：高岡健吾 録音：長谷川有紀、相馬大輝

【作品概要】 老齢のこずえは認知症をわずらい、介護施設で暮らしている。そこへよく面会に来ていた息子の啓二。彼はいつしか施設を訪れなくなり、電話で対応を済ませるようになった。こずえの孫娘である紗希はその背景を知っている様子だ。一体何があったのか？



【選考経緯】 よくある認知症家族のドラマかと思いきや、思いがけない展開で驚きがあった。介護施設（ひまわりホーム）で暮らすこずえは認知症を患っており、何度も同じ問いを繰り返す。よく面会に来ていた息子の啓二だが、多忙を理由に母との会話はテレビ電話によるものとなる。時間が前後するのでやや分かりにくいのが、実は重い病を抱えた啓二が自分の死を前にして、認知症を患う母への対応策としてAIのテレビ電話を見出し、自分の情報をできるだけ多くAIに学習させ、認知症の母と自然な会話ができるようにしたのだ。時折、花を持って施設を訪れる孫娘の紗希はそんな対応が本当にいいのか疑問に思っている。近い将来起こりうるであろう、AIを利用したテレビ電話と身近なテーマを上手く組み合わせ、登場人物の感情表現を細やかに演出し、心を揺さぶる非常に優れた作品になっていた。

■審査員特別賞

たまご (20分57秒)

製作：カン・シンユウ

プロデューサー：Seunghye Lee 監督・脚本・編集：カン・シンユウ 撮影：Tei Lee
照明：Yu Seok Lee 録音：Koo Yong Lee

【作品概要】親は子供に卵を与える。子供が嫌がってもする。子供たちは卵に飽き飽きしている。ついに子供たちは卵が尽きる方法を考え始める。



【選考経緯】山間部で鶏を飼っている父親は獲れた卵を娘のもとに届け続ける。娘は、幼い自分の子供に食べさせるが、飽きて食べてくれない。不安にかられ医者に見せるが、何も問題ないと言われる。女性の目は虚ろで問題があるのはむしろ彼女のほうか。夜遅く帰宅する夫ともうまくいっていないように見える。卵を断ってほしいと夫に言われ、卵はもう要らないと父親に言うが、又しても押し付けられる。そして、ある日、幼子が遊ぶ浴槽に卵を次々に割り入れていく…。閉ざされた空間で鬱ぎ込む女性。親から子供への愛情も度を越すと痛みとして溢れ出る。身近な食べ物「卵」は、ある種の象徴かもしれない。「卵」にまつわる親子関係に苦悩する女性の心の叫びを淡々と描いて、静かな怖さを感じさせる映画である。